様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５７６

研究課題名（和文）自然言語における度合い概念の役割－認識と構文

研究課題名（英文）On the role of the notion of degree in natural languages - Cognition and Constructions

研究代表者
菊地　朗（Kikuchi, Akira）

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：８０１７７７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,500,000円、（間接経費）　450,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「度合い」で表される量的・数値的大小比較を行う認知概念が、従来考えられているよりも遥に深く言語システム全体に影響を与え、言語の多様な構文に反映されているのではないだろうかという着想に基づき、主に日本語と英語における比較構文、量的関係節構文、形容詞修飾などの多様な言語現象の分析を通して、「度合い」の概念が、単に量的な関係が表現される言語表現の分析に有用であるばかりでなく、事象構造など広範囲の現象に関与していることを示した。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the idea that the cognitive notion of degrees, which is crucially involved in the human cognition of comparison, has far deeper impacts on the whole of the language system than it was previously considered, yielding various contributions to many constructions. In this research, I have shown the importance of this notion through the analyses of such constructions as comparatives, amount relative clauses, and adjectival modification mainly in English and Japanese.

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：意味論

キーワード：度合い　比較構文　形容詞　関係節　日英語比較

## １．研究開始当初の背景

「計量(measurement)」が関わる諸構造（比較構文、遊離数量詞、too/enough/so/such 構文、段階的表現など）については、生成文法の枠組みで Bresnan (1973)が比較構文の統語的な分析をして以来さまざまな分析が試みられてきたが、特に、Kennedy(1997)が「度合い(degree)」の外延を基本単位のひとつに加えた意味計算システムを提案してからは、Heim、Corver、Schwarzschild、Beck らにより形式意味論の枠組みによる分析が深化し、統語構造や意味構造を形式的に扱う領域の言語学専門誌では毎号のようにこの構文に関連する論文が掲載されるに至っている。

このような状況において、さまざまな言語現象に「度合い」の概念がかかわっていると考える可能性が出ていると思われる。仮にそうであるとすると、この概念が言語システムのかなり中核的な部分にかかわっており、文法全体に影響を与えているのかもしれない。そして、「度合い」の概念を用いて文法全体を捉えなおす展望も出てくると思われる。もちろん、上記のような現象に「度合い」概念がかかわっているという指摘は、従来研究でも盛んに行われてきた。しかし、「度合い」の認知概念を中心に据え、文法全体を組み替える試みは、研究開始時点では、行われていないと思われる。

## ２．研究の目的

本研究は、「度合い」で表される量的・数値的大小比較を行う認知概念が、従来考えられているよりも遥に深く言語システム全体に影響を与え、言語の多様な構文に反映されているのではないだろうかという着想に基づき、多様な言語現象の理解には「度合い」の概念への言及が不可欠であることを示すことにある。本研究の代表研究者は、１で述べたような諸研究をフォローしてきたが、その過程で次のような着想を得た。すなわち、「度合い」で表される量的・数値的大小比較を行う認知概念が、従来考えられているよりも遥に深く言語システム全体に影響を与え、言語の多様な構文に反映されているのではないだろうかという着想である。

より具体的に述べるならば、「度合い」の認知概念は、比較構文等のあきらかに計量がかかわる構造のみならず、次のような多様な言語現象に深く関与しており、それらの現象の理解には不可欠であると考えられる。すなわち、(a)段階的形容詞・副詞の意味解釈、(b)副詞類（程度を表す強意詞など）の意味解釈、(c)数量詞の解釈と名詞句指定部の統語構造、(d)Tenny (1994)の measuring-out の研究で示されるような述語のアスペクト特性やイベント構造の関係、(e)量的関係節(amount relative)などの関係節構造、(f)感嘆文の統語的・意味的特徴、(g)good、bad、wise、silly などの話者の判断を表現する「評価述語」の解釈、(h)same/different を含む文の意味解釈、(i)tough 構文の不定詞(easy to read)、判断・原因の不定詞(stupid to do X / happy to do X)などの諸現象である。また、単に性質・状

態の度合いばかりでなく、空間と時間の表現にも大小の判断が関与しており、(j)前置詞句によって表現される移動・場所表現、(k)before/after などによる時間的比較表現の分析にも必要であると思われる。さらには、英語ばかりでなく、日本語においても、(l)遊離数量詞(floating quantifier)の分析、(m)「～すぎる」という語を含む文の解釈、(n)「（ひとつ）ずつ」などの分配的数量表現の分析にも不可欠であると考えられる。本研究代表者は、1980 年代に日本語の比較構文について先鞭的と自負する研究を行い、その後も主として記述的な研究を進めてきているが、英語に比べ、日本語の「計量」がかかわる諸構文の分析は、まだ記述的にも理論的にも立ち遅れていると考えており、本研究がその研究の推進に一役担うことを目標としている。

３．研究の方法

研究は、対象言語を英語と日本語に限定し、「度合い」概念が関与すると思われる種々の言語現象についての分析を通して「度合い」概念の役割を明らかにする。その方法は、伝統的な生成言語学で行われている手法であり、従来分析の検討と、インフォーマントやコーパスによるデータ収集、および仮説の提案とその検証の繰り返しであると言ってよい。

４．研究成果

「２　研究目標」で列挙した諸構文の内、３構文に関して、いくつかの論文集の中の１編として発表した。具体的には、次の 3 点である。

(1) 段階的形容詞・副詞の意味解釈について。特に、名詞の前に生起して名詞を修飾する形容詞の補部が当該の名詞の後ろに現れる、いわゆる「分離 AP 構文」について、それが許される形容詞類が、内在的に比較の概念を含むものであることを明らかにした。

(2) 関係節構造について。特に量的関係節(amount relative)と呼ばれる関係節構造について、おおまかにそれに対応する関係節が日本語にも存在すること、そして、その意味解釈が関係節と比較構文の両方に関係するメカニズムによって行われることを明らかにし、英語などの言語における量的関係節の解釈にもそれが応用できることを示した。

(3) 「～すぎる」という過剰概念を表す語を含む日本語文の意味解釈について。そのような文が多様な意味解釈を許すことを明らかにすると同時に、「非有界性(unboundedness)」の概念によって、その多様性が簡潔にまとめられることを示し、そのような解釈を可能にしつつ、この構文に見られるいくつかの制約を同時に説明するには、音声解釈はなされないが、統語的には存在すると思われる音声的に空の（度合いを表す）副詞が存在すると仮定することが必要であ

ることを示した。

当初の研究目標では、これらの構文ばかりでなく、数多くの他の言語現象も研究対象に含めていたのであるが、残念ながらそれら言語現象の分析を発表するには至っていない。しかしながら、ほぼ発表可能なレベルには達していると考えられるので、研究年度を過ぎたものの、今後も継続して発表活動を続ける意向を持っている。また、これも研究期間中には執筆の終了には至らなかったが博士論文のおおまかな枠組みや、そこで提示する予定の分析の概要も完成している。博士論文についても、今後、継続して執筆を続ける予定である。

## ５．主な発表論文等

〔図書〕（計　３　件）

(1) Akira Kikuchi、A phonologically empty degree adverb: A case from a verb of excess in Japanese、菊地朗、小川芳樹、西田光一(編)、『言語におけるミスマッチ』、東北大学大学院情報科学研究科、2013、pp.85-106.
(2) 菊地朗、「分離 AP 構文について」、秋孝道(編)、『言語類型の記述的・理論的研究』、新潟大学人文学部、2012、pp.1-11.
(3) 菊地朗、「関係節と比較構文」、畠山雄二(編)、『大学で教える英文法』、くろしお出版、2011、193-216.

## ６．研究組織

(1)研究代表者

菊地　朗（KIKUCHI, Akira）
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：80177790